寺田一彦著

海の文化史

文一総合出版，1979年，B５版，288頁，1,600円.

寺田博士の「海の文化史」を読みて

海は広い．狭い陸圏に生を亨けそこに生の営みをつづけてきている人類は海辺に立つとき茫洋たる空間，涯り知らぬ波方に伸びる世界に憧がれと夢を托して心に開放を感ずることは今も昔に変りない．

だが現実はそうでない．人智は長い歴史を通じて海についての知識を増し海の利用の道を徐々に拓いてきて残されきた国の主権拡張の場所として海洋分割へと滔滔と世界は動いている有様である．それは海の平和利用の名で話し合いが進められているのであるが各国はそれぞれの将来の運命と利益に係る国際の政治経済外交の大問題としてそこに幾多の紛糾に現在将来に直面しなければならぬ状況になってきているのである．

そこで国としてはただ専門家や政府に問題を托するのでなく，大衆は内政問題と同様にこの問題の核心に正しい理解と注目と関心を寄せねばならない．マスコミの発達は新聞テレビなどを通じて随時にこの問題についてのニュースを流してはいるが，歴史的経緯，遠い将来を見通して多角的な見地から高邁な意見をきくことは遺憾乍ら断えてない．

ところでこの度寺田一彦博士の「海の文化史」の上梓を見た．博士は周知の通り海洋学者としての多くの業績をあげ，特に又気象庁を通してわが国の海洋学の行政面で大きく貢献された人であり又広い読書範囲をもつ才筆家でもある．

本書の執筆について博士は，まず序章に母なる海をえらび地球の誕生から海洋の生成へ，そこでの原始生物の出現，単細胞から多細胞生物へ，動植物の分化から高等生物への進化の過程を辿った後第１章以後時代の進む順序を追うて人類の海洋利用特にその基本になる海路の開拓発展の跡を陸面での国や民族の勃興，衰退又移動の歴史に照してそれとの連関に注目，興味あり示唆に富む事例をとり上げ巧みに組み入れて綴られている．成るほど単なる海洋の探究史自体ではなく人類文化の発達の中での海の利用の歴史を辿られたもの「海の文化史」であることがよく理解される．

遠く離れた地域に起った異文化同士の交流がまず陸路の開拓を通じて始まったことは誰しもの知るところであるが，又これが海路の開拓に随伴して進んだこと更それが陸路交通が際会する困難から免がれるために役立ってきたことを知るべきである．又この海路を通じて文化の伝播交流もいろいろの支障困難の克服によって達成されてきたことを忘れることができない．それは自然がもたらした困難の外に人間のもつ我欲を裏付けもする．殺戮闘争による多くの人命の犠牲を伴ったこと陸上でも海上でも変りなかった．かの有名なマルコポーロは陸路パミル高原をゴビの砂漠を越えて今日の北京当時の元の首都大都に達しクビライ帝に謁した後二十年中華に滞留各地に見聞を広めたというのが帰路クビライの甥の子に当るペルシヤ王に妃と配されたモンゴルの女のペルシヤへの送り届けの命を捧じ戦乱の陸路を避けてアモイからスマトラに南下，インドの南端をかすめて命に応えたというのが途上２年の日子の間には度を重ねての海賊の襲撃に多くの犠牲者を出したという．又故郷ヴェネチアに戻ったポーロはヴェネチアとゼノアの反目の中でヴェネチア艦船の指揮官となったがゼノアの勝利の中に捕えられ獄舎に虜囚の年を重ねたその間に成ったのが「東方見聞録記」となったという．

こうして盛り込まれた挿話をそれぞれ面白い昔話として軽く読み味う人も多からうがそれに異議を唱えようとは思わない．

だが私にとって昔語り単なる昔語りではない．それらの昔語りは今日われわれが直面する重大な海の問題を考える上で古くて新しい示唆の多くを包蔵する昔語りであるのだ．但しその貴重な示唆を引き出す仕事はかかって読者の自身の目であり努力にあるというもの私はそうした読者が一人でも多く本書に接せられんことを望む次第である．

（菅原　健）